

論文の要旨

論文題目 梁啓超の近代観
—思想的矛盾とその展開—
氏名 王 閏梅
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 22 年 11 月 30 日

論文の要旨

本論文は梁啓超の「救国」をめぐる政治的生涯の幾つかの特徴的場面を抽出して実証的考察を行なった。

まず第一章では、梁啓超の一生を貫いた行動理念を、西欧の Political economy の訳語としての「経済」への抵抗、言い換えれば漢語の「経済」を堅持する姿勢から窺うことができた。梁啓超は西洋近代知識を日本経由で中国に紹介しようとしたとき、近代的な国民国家形成の重要な柱となるべき Political economy の意味をよく理解しながらも、その訳語「経済」に対しては一生抵抗し続けた。これは彼が「経済」という言葉により重要な意味を託していたからだったと思われる。彼は清末に興った経世済民的気風の影響を受け、公羊学への信奉から出発してそれを儒家的伝統理念としての「経済」へと還元し、そこに彼の一生の行動規範を求めた。

しかし、この行動規範には大きな矛盾が潜んでいた。梁啓超は清朝考証学が思想界に及ぼした影響を一言で「復古によって解放をおこなった」と評し、それをヨーロッパのルネサンスに比擬した。公羊学をその理論的基礎にした梁啓超は自身の活動においてもまさしくこの「復古によっての解放」を求めようとした。しかし、公羊学復古に収斂する儒学の再・イデオロギー化と考証学に内在する客観的近代実証精神との二項対立は、彼の行動に極めて多くの矛盾をもたらした。この章で論じた孔子像の問題、第二章の「新文体」、第三章の梁啓超の「詩界革命」を放棄するほど「古風格」へのこだわり、また第四章で論じた梁の小説への戦略的提唱と第五章における晩年の伝統「回帰」衝動などはすべてこの矛盾に由来していると言ってよい。そしてこの復古的前近代イデオロギーによる地場の近代精神の抑圧が中国近代思想史における最大の問題であるというなら、梁啓超が模索していた「近代」は、西洋近代と異なる中国的「近代」であった。このことはその活動の初期からすでに基調が決められていたと言えよう。

梁啓超の一生を左右していた二つの焦点にも矛盾が見られた。一つは孔子の扱い方、孔子解釈をめぐるものである。梁の行動規範の源が孔子にあることは疑いないが、彼は孔子を異質の西洋文明に対抗しうる中国文明の核心と見なし、中国思想の最高代表者として位置

付けていた。しかし、梁啓超は孔子の教えから、その場その場の現実に応じて、ある意味で都合主義的に必要な要素を取り出し、孔子に一つの固定した解釈を与えることはしなかった。もう一つは学問の扱い方、解釈である。儒家思想の伝統に根ざした学問観は梁啓超の晩年まで一貫していた。彼は西洋知識をより中国に入りやすくするために学問体系を組み立て直そうとしたが、彼自身が行った西洋研究や「中国思想」研究は、当初から「学問のための学問」研究ではなかった。

第二章では梁啓超のジャーナリズム活動とその「新文体」を取り上げた。梁啓超は政治的实践を目指して言論活動を行ない、その最初期から「椎輪や土階」になろうとして、自分自身を縛ることなく、筆の赴くままに人々を動かそうとした。日本亡命後に彼が参照した日本の思想界・文学界の言文一致運動からヒントを得て、中国の「文界革命」を提起し、思想的に最も活躍していた『新民叢報』の時期に「新文体」を創りあげた。しかしそれは中国で言文一致を提唱する意図からではなかった。

梁啓超は「文」を中国思想を表わす媒体であると見做していたが、それはもちろん同時に中国文化、文学の表現媒体でもあった。彼の文体理念は従来からあるものをすべて有効利用する主義に基づいていた。そこで伝統的文体や語彙を引き続き用いるが、翻訳語や新しい論理の説明に必要な概念語をも積極的に取り入れた。その際、彼が徳富蘇峰の文体を選んで自分の「文界革命」の目標と掲げたのは、蘇峰の「漢文調欧文脈」の文章から自分の文体を発見したためだろう。

また、梁啓超は日本の言文一致運動の結果に刺激され、俗語体（言文一致体）で文章を書くことが文明の進歩と考えた。そして、言文一致は中国が今後進むべき方向であることを指摘はしたが、文字と言葉の乖離という現実的困難の前につい後退せざるをえなかったのである。一方、梁啓超は「文」を道具と考えていたように思われる。この面で、彼は分かりやすい文章を書き、多くの人々を啓蒙しようと図ったが、結局彼が主眼としたのは読書人の意識改革だった。梁啓超は中国の強固な儒教的イデオロギーの下で、東洋的「文」の伝統を強く保持していた。そのため、彼の「新文体」は、「教養」の次元でそれを身につけていた、福沢のある種の変わり身の早さとは異なり、「民衆本位」の「新文体」とは成りえず行かず、近代的階級性という基準に即して言えば、せいぜい「中流知識階級本位」に止まらざるをえなかった。

第三章は主に梁啓超の台湾体験を通して、彼の詩をめぐる問題意識を考察した。清代に入ってから詩は公に服務する「道」であるより、私的な「志」や「情」の表現媒体となった。文人はあくまで文をもって政治に参加することが主要な義務であり、目標でもあったが、他方詩作はこの正道に支障を来さない程度にとどめなければならない。しかし、「詩可以群」（『論語』陽貨）という儒家的伝統や『詩経』以来の漢詩の儒家的教化作用は、やはりずっと中国知識人の意識を去らなかつた。この二つの意識が梁啓超の漢詩観の基調を決めていた。

梁啓超は日本亡命後の1899年末に詩作における「新意境、新語句、古風格」を提唱する

ことにより、を起そうとしたのである。しかし、「古風格」が「新語句」とは当然ながら齟齬を生じ、脅かされる存在となった。この困難に直面して梁啓超はあくまでも「古風格」を維持しようとしたが、結局所期の三つのスローガンを兼備させることができず、「詩界革命」を諦めた。梁は西洋知識・思想を中国により多く取り入れようという思いから「詩界革命」を提起したが、それら知識の摂取が深化するにつれ、彼は西洋にも文化があることを発見し、その素晴らしさに魅了された。これをきっかけとして梁啓超は中国の学問、文化の全面的な見直しを試み、詩を西洋文化に対抗できる中国文化として位置づけようとした。

1911年の春に、梁啓超は林献堂の招待により、多大な目的を抱えて念願の台湾行を果たした。彼は成功した日本の近代化政策を視察しに行ったが、少しも得るところがないばかりか、台湾の現実にこれ以上ないほどの幻滅を感じさせられた。台湾訪問中、梁啓超の旧台湾文人との交流は主に詩を通して行われた。台湾総督府の厳しい監視下で詩を通して対話を行うことは、彼らにとって監視を逃れるための手段ともなった。同時に、「以詩代言」という言葉が象徴するように、詩はやはり中国読書人にとって感情交流に最も適した媒体であった。しかし、梁啓超と旧文人との間には、詩と日本語の位置づけにずれが生じた。植民地台湾という特殊な場で旧文人たちと漢詩を通して交流することにより、梁啓超は詩の民族イデオロギー性に目覚め、詩を通して民族主義を初めて体験した。しかし、これは彼が本来的に詩に求めていたものではなかった。清朝の枠組を生かした改革を目指す立場から、梁啓超は民族主義というイデオロギーの近代性を自覚していながらも敢えて「漢」民族主義を避けざるを得なかったのである。辛亥革命後にこの必要がなくなってからも、彼は詩を政治に利用しようとはしなかった。それは彼の漢詩観に変化が起きたからである。台湾での詩作の場から感じとった中国伝統文化の魅力は、梁啓超に漢詩の文化的価値をさらに実感させた。

第四章では梁啓超が小説界革命を提唱した前後の言動を検討対象とした。梁は政治宣伝に役立てるために、それまで文学のなかで低い地位にあった小説に注目し、典型的な効用主義的文学論あるいは中国政治文化の基本精神からスタートした。亡命後、日本の政治小説との出会いを契機に、小説に関する知識を系統的に吸収するうちに、彼は西洋における小説の位置づけ、作者、内容、創作特徴、文体、言葉などが中国の説部と異なっていることを少しずつ自覚するようになった。元来、梁啓超の主要な関心事は政治であったから、救国の方策を求めるために日本に亡命して以後の最初の5年間は西洋近代思想の吸収に明け暮れた。このような蓄積を自己の思想的土壌に接合させ始めた頃、彼は中国の伝統学問を全面的に見直す姿勢をも示した。

この流れのなかで、梁啓超は小説界革命を提唱し、中国最初の小説専門誌を創刊して自らも創作を試みることになったのである。その結果、彼は小説に二つの役割を期待するようになった。一つは引き続き政治的実践のための宣伝の役割、もう一つは西洋文化に対抗するための近代中国文学の構築という役割である。したがって、小説への新たな期待は、

梁啓超の夢みる中国像、つまり富強な国力だけでなく、文化の繁栄をも併せもつ国という構想と深く関わっていた。そこで、彼は新しく受容した進化論や日本の言文一致運動から学んだ知識を駆使し、主に俗語をベースとする中国文学史の再構築を試みた。しかし、近代小説の特徴を自覚した梁啓超の創作実践は成功したとは言えない結果に終わった。

また、梁啓超は一般民衆の啓蒙を目指して小説論を開始したが、政治小説で扱うべき内容と、当時中国民衆の知的レベルが非常に低いという現実認識から、彼は小説の宣伝対象を読書人に置くようになった。この現実認識が梁啓超に小説の文体、言語表現についての妥協をもたらした一要因であったと考えられる。

第五章では梁啓超の中・西洋文明の宥和論について考察を行った。梁において、中国文化・文明と西欧文化・文明に対する認識は、生涯一貫性が保たれていたわけではなく、時と状況の変化に応じて異なる様相を呈した。とりわけ晩年になると、いわゆる「伝統回帰」に転向したが、それは嚴復、康有為、章炳麟らの晩年の転向とは明らかに違う性質を持っていた。

維新変法期における梁啓超の中・西文化論は、中国のものを経と緯とし、西洋のものにあくまで「輔」の役割しか求めていなかった。1900年代における梁啓超の中・西文明対応は中・西結合という清末思想界の基本的スタンスからは外れなかったものの、洋務派の「中体西用」論からは質的な飛躍を見せていた。彼がイメージし、作ろうとした「新民」は、この思想の集約であり、その実践者でもあった。そしてこの近代的主体性を付与された「新民」の主要任務は、当面中国に必要な西洋文明を精力的に吸収することだと梁啓超は考えていたようにみえるが、1903年の渡米後には次第に中国の伝統思想から優れたものを抽出する作業へと重心を移していった。

梁啓超は時勢によって論点の中心を変えはしたが、基本的立場は辛亥革命後まで一貫していた。ところが第一次大戦の終結と共に、彼が活動の重心を文化事業に移したことによって、中国・西洋文明についての言論が再び目立つようになり、そこに一定の変化も見られるようになった。それは西学が危機的状況にあることを知り、特に第一次世界大戦後のヨーロッパを視察して、西学の行き詰まりを実感したことによる。戦後ヨーロッパの荒れ果てた姿が梁啓超の視座の転換を促し、以降は中学を発掘研究して西学を補おうと決意させた。そこで彼は世界をリードする中国的な文明を創出しようとしたが、それでも西学を続けて取り入れる姿勢に変化は見せなかった。彼がここで中国的な理想的人格を再び大きく提唱していることは、あくまで現状の打開策として提出されている。

最後に終章では、論文の全体を総括し、今後の課題と展望についても触れた。今文⇔古文の葛藤による中国的「近代」の模索をその実態に即して、とりわけ古文運動の面をも視野に入れて考察してゆきたいが、清末の公羊学の関係者や譚嗣同、古文学者の章炳麟らの思想家たちが中国的「近代」の道を探し求める際に、仏教思想がいかなる意味合いを持っていたのかについても、今後続けて考えていきたい。